《修士論文要旨》

集落の土地利用

鐸　木　厚　太*

従来の集落研究は集落を個別に取り上げて、検出された遺構の編年もしくはグルーピングをして階層性や内部構造を求めようとした手法が多かった。しかし、こうした研究は本質が抽象的になることからある種の低迷性が指摘される（柴尾1998）。これらの課題から、集落遺跡論から集落とそれをめぐる耕地や灌漑を含めたムラ全体の経営基盤を含めた総合的なアプローチが盛んになりつつある。特に奈良盆地では条里地割が中世に遡ることが指摘されて以降、土地開発への関心は高いといえる（中井1982、寺沢1987、山川1993）。

また、考古学では中世集落の検討を行う際に、集村というひとつの画期を着目して検討が行われている。古代における一般的な集落形態は家が点々とあったとされる散村状態に規定される。この言葉を定めた地理学では塊村、散村、小村、集村などというように様々な集落の形態に合わせて、使い分けている。また、集村が行われた時期については研究者や地域によって異なるが、西日本では13～14cにかけて行われ、15c前半には終了して、現在の景観の基礎となったとされる。このため、中世前期における集村という画期は重要な意味を持つ。

今日における集落研究は、2000年から進展していないのが現状である。その一方、発掘資料の報告は蓄積され、最近の調査成果から土地開発や集落の検討を行う必要性があると考えられる。こうした土地開発の中で、集村の土地利用とそれ以前の土地利用についての検討を行う。

まず、集落の土地利用についての問題意識を明確にするための整理を行う。土地利用という景観について取り組んできた歴史地理学者の金田氏によって次の指摘がされている。①開拓と土地利用集約化②条里との関連性③灌漑整備④溜池⑤耕作地（島畑）、この５点と集落の関連性について提言している（金田1999）。また、奈良県における考古学による集落研究を牽引してきた山川氏は、従来の研究が個々のパーツや構造について扱ってきたことの問題性について指摘し、農村集落の経済基盤であった農耕についての着目がこれから必要であるとしている（山川2003）。検討を行うために、遺物の時期観を統一した土器・陶磁器編年を使用する。中世前期の土器が主流であるため、現在安定した時期観を持っていると思われる大和型瓦器椀の川越俊一編年、大和Ｂ型編年の菅原正明編年、東播系須恵器の森田編年を使用している。

検討方法は集落が転換期とする古代～中世にかけて行われたとする現行条里への開発についての検討を行い、それを地域毎に概観する。ここでいう旧平城京と平城京外について大別し、更に平城京は各河川を個別に取り上げ、検討する。

平城京域のおける条里施行の転換期は10cの後半頃からと推定した。条里施行は、佐保川の中世流路が12c～15cである点と西大寺地区の調査から11c末にはほぼ終了した可能性が高い。この

平成25年度　*文学研究科文化財史料学専攻

10c後半に開始された背景は平城京遷都後の利用が減少したという点と国家による平城京の管理が緩和された可能性が考えられる。一方、平城京外では９c末～10c中頃における河川埋没の現象が多く見られ、主に佐保川や初瀬川に流れ注ぐ、菩提仙川や布留川流域などの支流で行われていた。12c代には箸尾遺跡や多遺跡など奈良盆地南部などの河川付け替えも盛んになることが判明した。

集村化以前と集村のとりまく環境について、次の点が指摘できる。①集村以前とは継続的な定住がされない②移村と形成を繰り返していた③11、12cの集落に関しては条里を意識していることが指摘でき、ある程度の規則性を持って集落の成立が行われた可能性が高い。一方、集村後の土地利用とは①集村とはひとつの場所に集住②集村以後は長期間におよぶ定住がみられるか③そこに規則性がみられる（条里配置）④水の得られる場所（灌漑）⑤農業との関連（耕地化）。こうした要因が集村を規定するものと考えられる。

また、集村の検討を行う上で、成立当初の濠は中世後期の拡幅や近世期に破壊され、同時期に形成された環濠集落の遺跡から幅は２～４ｍ程度のものであったことが予想される。こうした検討から集村は13c前半～後半にかけて行われたといえる。中世前期の景観とは12c～13c頃は集村と小村が広がり、開田された農地が青々と広がっていったものだと考えられる。